

Tomoko Tokunaga

*Learning to Belong in the World:
An Ethnography of Asian American Girls*

徳永 智子
(群馬県立女子大学)

本書は、移民の子ども・若者をグローバル化や多文化化を担う先駆者として捉え、文化や言語の橋渡しからコミュニティづくりに至るまで、移民の若者がもつ強みや可能性を描いている。教育学・文化人類学・社会学等による学際的アプローチから、2年間に及ぶフィールドワークに基づき、アジア系アメリカ人の女子生徒たちが複数の国・文化・言語のはざまを生きるなかで、どのようにホーム(home)／居場所(ibasho)を形成しているのかを考察している。

主に紹介するのは、アメリカ東海岸の高校に通うアジア系移民1世、1.5世、2世の女子生徒9名(フィリピン系、ベトナム系、中国系、インド系)である。著者は、低所得層のアジア系アメリカ人の高校生を対象に放課後支援プログラムを提供するNPOのボランティアとしてかわり、生徒たちに寄り添いながら、学校、家庭、地域でフィールドワークを行った。アートワークショップやオンラインでのデータ収集なども行い、多様なデータを用いて、女子生徒たちがホーム／居場所をつくりだす様子を詳細に描いている。

本書は、生徒たちがアメリカ社会においてアジア系移民女性として幾重にも周辺化されつつも、グローバルにホームを形成し、日常生活のなかで居場所を作る

など、多層的で複数のホーム／居場所を主体的に創造していることを明らかにしている。第2章では、彼女たちがホームランドとホスト社会のはざまで帰属意識を形成する困難さと可能性を検討した。第3章では、彼女たちの日常世界に視点を移し、高校の地下で多様な人種・文化・言語的背景をもつ仲間と共につくる居場所について論じ、第4章では、彼女たちのもう一つの居場所であるNPOの放課後プログラムでの様子を描いた。第5章では、彼女たちがショッピングモールなどでの「モノ」の消費を通して、アイデンティティや「女の子らしさ」を形成する過程を論じ、第6章では、メディアやポピュラー・カルチャーの消費を通して、国境を越えて想像上のホームをつくる様子を考察した。ここで取り上げられる多様な場からも分かるように、本書は教育研究で着目されることが少ない、家庭や学校以外のオルタナティブな学びの場の重要性も指摘している。

日本でも移民の子ども・若者が増加しており、同化や排除の文脈で語られやすいなかで、彼ら・彼女らのエンパワメントにつながる研究・実践を蓄積していく必要があるのではないだろうか。本書がその一助になれば幸いである。(24cm×16cm、156頁、Springer、79英ポンド、2018年)